小野益次を演じて

――『浮世の画家』と世界のなかの日本

渡辺 謙（俳優）

カズオ・イシグロ作品のなかで、
とりわけ難解な主人公といえる『浮世の画家』の小野益次。
一人称で語られながら、肝心の記憶や印象の整合性に齟齬が生じがちであるなど、
解釈を誤れば破綻してしまいかねない同作が2019年にNHKでドラマ化されている。
物語を回すのが主人公の役割であることを強く意識させる、
揺るぎない小野益次像を確立した渡辺謙が、その過程を振り返る。

――NHKエンタープライズの渡辺一貴ディレクターは、『浮世の画家』をドラマ化するにあたり、「主人公の小野益次役は渡辺謙さんしか考えられなかった」と語っています。出演を決めるまでにどのような経緯がありましたか。

渡辺　お話を伺った段階では、まだ藤本有紀さんの脚本は上がってなく、とりあえず原作を読むことにしました。でもなかなかページが進まないんですよ。というのも、一本の筋では話が進まないわけです。一体どれが本当で、どれが本当じゃないのか。小野が嘘をついているのか、彼の人生そのものが虚飾に満ち溢れているのか。その辺が非常にミステリアスと言えばいいのでしょうか。だいたい小説って一つひとつ腑に落としながら先に進んでいくものですけど、着地がないままに次々と変な方向に持っていかれる感じがして。最後まで読み終えて、小説のストーリーのなかにすら着地がないような、不可解な部分が感じられて、逆にすごく好奇心が湧いたんです。

――脚本を初めてご覧になったときの印象は？

渡辺　小説と違って、映像化するときは制限があるじゃないですか。シークエンスを切り取っていく。それが藤本さんは非常にうまくて、脚本を読んだときには少し霧が晴れて、光明が見えた感じがしました。小野の本質、言ってみれば正義や安寧といったものに向かう必要はないということがよくわかったんです。結局、撮影していくなかでも、序盤にこれは実際本当なのか嘘なのかよくわからない部分がたくさん出てきますが、迷路を作るように、あるところまで行ったら行き止まり、そんな感覚でシーンを重ねていきました。

藤本さんの脚本が上がってきたときに、僕が小野の役をやりたかった理由もよくわかりました。正答がない、正しいものを求めていくだけが人生ではないということに、非常に共感したんですよね。結局、業種は違えどもアーティストを描いているじゃないですか。アーティストというのは、その時代の潮流や社会情勢、世の気運といったものに勝手に流されていくわけです。もちろんそれが「浮世の画家」というテーマにつながっていくのですけど、そういうところにも俳優として非常に共感できたんです。彼が抱えている悩みや苦しみや慢心に。

『浮世の画家』の怖さと難しさ

――渡辺さんの周りに、小野益次のような戦争の影を背負っていた方はいましたか？

渡辺　さすがに僕の親父の世代でも戦争には行ってないですね。例えば藤田嗣治さんという画家がいるじゃないですか。あの人は、戦争によってアーティストとしての人生を狂わされたという意味では、すごく近い気がします。僕の先輩の俳優で、従軍して何かやったという人はいなかったので、それについては歴史のなかで勉強するということでしかなかったですね。

――イシグロは「序文」（『浮世の画家［新版］』、ハヤカワepi文庫）で、「あらゆる地位や職業の人に政治的立場の選択を迫る強い圧力がかかっていた」サッチャー政権下のイギリスで『浮世の画家』が書かれ、自身も「炭鉱ストライキをめぐる意見の相違から（中略）もっとも近しかった友人と大喧嘩した」と述べています。

渡辺　ある時代によしとされた発言や行動が、時代の変化によって、「なんであいつら、あんなことを言ってたんだ」と、一八〇度ひっくり返った評価をされてしまうことがありますよね。それこそ、強い意志を持って何かをすることそのものが、否定される時代になってきているような気がするんです。もしかすると、口角泡を飛ばしながら激論し、未来や社会を語れた時代というのは、いい時代だったのかもしれません。小野は、ああいう激変する時代のなかで、本当はそんなつもりはなかったのに、流されるように戦意高揚に走ってしまい、また、のちにそれを自己否定していくわけですが。

僕は作品をやるときに、今この時代に生きている方々に何を届けられるかをいつも考えています。その時代の話でも、未来の話でも、今生きている方々がどう受け止めてくれるのか、その人たちのどこにこの作品を突き刺していけばいいのかということは、やっぱり考えるんです。『浮世の画家』はイシグロさんの作品のなかでも古いものですが、寛容でなくなっている世のなかで、小野を通して描かれる人間の曖昧さや傲慢さを、今の視聴者がどういうふうに捉えてくれるのか。この作品を掘り起こして現代の視聴者に届ける意味というのは、そこにあるんじゃないかと思いました。

――二〇一九年一〇月、カンヌで開催されたコンテンツ見本市MIPCOMで『浮世の画家』が上映された際に、舞台挨拶で「とんでもないオファーを受けてしまったと後悔してしまったほどだ」とおっしゃっていましたが、小野益次は他の映画の主人公に比べてどう違いましたか。

渡辺　スライムみたいな感じなんです。いつもならその役が持っているものにできるだけ添うように、自分の体を寄せていくようなところが

この続きは本誌でどうぞ！